

[Memorabilia]

—Pethau Cofiadwy mewn Astudiaethau Cymreig—

Rhif 7: 水谷 宏「現用カムライグ語の ‘ei-’ の発音」

「現代カムライグ語」Cymraeg Diweddar は、20 世紀後半、特に 21 世紀に近いころ以後のカムライグ語を「現用カムライグ語」Cymraeg Cyfoes と呼んで区別することができる。この変種では、‘ei-’ と綴られる前方型二重母音の発音が [əi] と [ei] の二通りがある。しかし、20 世紀に出版された学習者向けの入門書の他、学術書などでも、前方型二重母音にはそのどちらかが含まれていないものがある。[əi] だけのものとしては、Smith, A. S. D. (c. 1925) *Welsh Made Easy*; Bowen, J.T. & Rhys Jones, T.J. (1960) *Teach Yourself Welsh* の比較的古い出版のものがあり、[əi] と [ei] 両音を併記していて、「自由変異」free variation として扱っていると思われるものには、Thomas, P. W. (1996) *Gramadeg y Gymraeg* がある。一方で、説明では両音を併記してはいるが、本課に出てくる単語の発音には [əi] だけが表記されているものに、Brake, P. & Myrddin, M. (1994) *Welsh in Three Months* がある。反対に、説明では [əi] だ

けが表記されているが、テープの録音では [ɛɪ] が用いられているものに、King, G. (1995) *Colloquial Welsh* がある。同じ著者の (1993) *Modern Welsh* では、自明として特に説明を与えず、従って、[ɛɪ] としていると推測するしかないものもある。他方、Thorne, D. A. (1993) *A Comprehensive Welsh Grammar* では、[əɪ] は含まれず、[ɛɪ] のみとなっている。

上記のテキスト類は、英語話者を対象に書かれているので、英語の発音を参照にして、カムライグ語音を説明しようとする場合が多い。従って、われわれ日本人読者が参考にするときには、以下のことに注意が必要である。

カムライグ語の ‘-ei-’ の綴り字の発音が、英語の eye 「目」の発音と同じだとする説明がなされる場合がある。日本で英語教育を受けた日本人であれば、だれもが eye /aɪ/ と発音してしまい、カムライグ語の ‘-ae-’, ‘-ai-’, ‘-au-’ の綴り字の発音と変わらないことになってしまう。カムライグ語では、mae, Mai はいずれも /mai/ と発音され、dau は /dai/、cau は /kai/ と発音されるが、‘-ei-’ の綴り字の単語、memir ‘maiden’, eiddo ‘property’, cemïog ‘penny’, beirdd (bardd ‘bard’ の複数) 等々の ‘-ei-’ は、/aɪ/ ではなく、[əɪ] と発音されるのである。または [ɛɪ] と発音されて、これらの単語は、memir ['məɪnɪr]~['mɛɪnɪr], eiddo ['əɪðɔ]~['ɛɪðɔ], cemïog ['kəɪmjɔg]~['kɛɪmjɔg], beirdd ['bɛɪrð]~['bɛɪrð] と発音されるのが一般的である。

では、なぜ eye 「目」の発音と同じとの説明がなされたかということ、カムの国では、英語の地域的変種（方言）の一つである「ウェールズ英語」 Welsh English, Wenglish も話されており、むしろ話し手の数からは、カムライグ語の話し手の数よりも多い人たちがこの英語方言を日常的に使用しているからなのである。多分のこのような説明をしているテキストの著者自身の英語の方言も、この「ウェールズ英語」の方言の一種であろうと推測できる。そして、この英語の方言では、eye 「目」の発音は /aɪ/ ではなく、[əɪ] と発音されているのである。カムの首都 Caerdydd /'kairdið/ (英語名: Cardiff /'kɑdɪf/) の街頭で耳にする地元の英語の話者の発音でも、eye [əɪ], price [prɛɪs], life [lɛɪf], rice [rɛɪs] が一般的である。そのような英語の方言を話している学習者が、「カムライグ語の ‘-ei-’ の綴り字の発音は、英語の eye 「目」の発音と同じである」との説明を読めば、memir を ['məɪnɪr]、eiddo を ['əɪðɔ] と発音することは極めて容易なことなのである。しかし、/aɪ/ はあるが、[əɪ] の発音習慣のないわれわれ日本人には、この説明はまったく意味をもたない。むしろ危険な説明ということにもなりかねない。口を大きく開けて /aɪ/ と発音し、口をすこし開けて（上下の歯をかみ合わせるようにして）[əɪ] の発音をし、2種類の「アイ」の発音習慣を身につける必要がある。

さて、‘-ei-’の綴り字を [ɛɪ] と発音することについては、20 世紀後半、特に 1970 年代以降の「現用カムライグ語」Cymraeg Cyfoeth の特徴と看做すことも可能であろう。即ち、「自由変異」として明記する（即ち、[əɪ] と [ɛɪ] の両方の発音を認める）場合と、そうでない（[əɪ] を認めず [ɛɪ] のみを 4 種類の前方型二重母音の一つとして認める）場合とにかかわらず、この綴り字が [ɛɪ] と発音されるのは、20 世紀の後半になってからと観察されるのである。それ以前の「現代カムライグ語」Cymraeg Diweddar では、この二重母音は [əɪ] として認識されていたと推測される。事実、John Morris Jones (1913:115) が言及しているように、「古期カムライグ語」からの発達過程において、‘-ei-’の綴り字の [-ɛ-] の母音の発音が、「開いた -ɛ-」から「閉じた -e-」を経て、「現代カムライグ語」の [-ə-] に発達していたというのが定説であろう。ただし、開音節や強勢のある音節では、「現代カムライグ語」の [-aɪ-] への発達が指摘されており、その場合には、綴り字も ‘-ai-’ となっている。

生まれながらにカムライグ語を母語として習得した、所謂「ネイティブ・スピーカー」（現地では、Welsh が第一言語という意味で、「W1 の話し手」と分類されることがある）は、当然のことながら生まれ育って地域の方言を話す人たちである。そのようは人たちは、「綴り字」以前に「話し言葉」Cymraeg Llafar が身につけているから、「働くこと」という概念をカムライグ語で口にする時には、[ˈgwəɪθjɔ] と発音し、「旅をすること」は [ˈtəɪθjɔ] というのが習慣であった。そして、学校等の教育を通じて習得した「文章語」Cymraeg Llenyddol の使用では、‘gweithio’, ‘teithio’ の綴り字を用いるのである。

他方、1970 年代以降の「現用カムライグ語」ないしは「生きたカムライグ語」Cymraeg Byw では、一つの方向として、「綴り字発音」Spelling Pronunciation が考えられる。カムリの国に生まれ育ったカムリの人々のなかに、英語を母語として成長し、学校教育等々でカムライグ語を習得した人々（Welsh が第 2 言語という意味で「W2 の話し手」とされる人々）は、‘gweithio’, ‘teithio’ の綴り字が「視覚言語」として先に目に入り、その綴り字通りに発音すると [ˈgwəɪθjɔ] や [ˈtəɪθjɔ] のように、「綴り字通りの発音」が定着していったものと推測できるのである。1970~80 年代では、「旅をすること」を [ˈtəɪθjɔ] と発音する人は「W1 の話し手」であり、[ˈtəɪθjɔ] と発音する人は「W2 の話し手」とであると判断することも可能なほどであったが、‘...gramadeg y Gymraeg yn rhan olaf yr ugeinfed ganrif’—20 世紀最後の時期（部分）におけるカムライグ語文法の記述を目的とする Thorne, D. A. (1996) *Gramadeg Cymraeg* (英語版は、1993 年) では、そのような判断は不可能になったという現実を伝えている。言い換えれば、1970 年代以降に「綴り字発音」が定着の方向に向かい、1990 年

代には、[əi] → [ɛi] の発達が「現用カムライグ語」において、ほぼ完成したと判断できるのである。

しかしながら、文法書で扱われていないとの理由から、現在、['gwəiθjɔ] や ['təiθjɔ] の発音がまったく聞かれなくなったとするのは早計である。今年3月に関西で会ったカムリからの留学生（多分、1980年代初めごろの生まれのW1の話し手）との会話でも、この二重母音の発音を耳にした体験が筆者にはある。完全に消滅（死滅）した訳でないのである。確かに、1990年代初めごろの方言研究会で、いくつかの地域で、地域的方言変種の表現が聞かれなくなり、標準化が進んでいるとの報告もあった。しかし、[əi] → [ɛi] の発達には、標準化と平行する形で、「言語使用域」Registerの問題が関係しているであろう。

地域的方言変種とは別に、「話し言葉」Cymraeg Llafar の特徴として、この二重母音の発音は、「もっともくだけた」使用域では、['gwɪθɔ] のような発音習慣が古くからあった。それが、「中立的」使用域で ['gwəiθjɔ] となり、「もっとも丁寧な、公式の」使用域で、['gwɛiθjɔ] となり、限りなく「文章語」Cymraeg Llenyddol に近づくのであった。このように考察してみると、'ei' の綴り字の発音は、[-əɪ] ~ [-ɛɪ] と表記するのが妥当であろうと思われる。

もう一つの説明の可能性は、カムライグ語の [ə] と [ɛ] は極めて近い母音として発音されているという、調音的事実がある (John Morris Jones, 1913:16)。John Morris Jones の指摘は、中期カムライグ語の初期の段階での写本の綴り字を観察した結果に基づいているが、現在市販されている教材の録音（本稿の冒頭にいくつか紹介したものを含む）においても、そのような調音的事実は観察されるのである。筆者自身が、1993年度にカムリ全域で実施した方言の現地調査でも、この事実は観察された。例えば、pen /pɛn/ 「頭」は、[pɛn] ~ [pən] と記述することが可能である。

最後に、それではネーティブ・スピーカーではないわれわれ日本人学習者は、どのようにすればいいのかというと、相手の発音を聞く時には、[-əɪ] ~ [-ɛɪ] のように幅をもって聞くようにし、どちらか一方の発音だけを期待しないことである。そして、こちらが話す場合には、強勢のない音節では [-əɪ] と発音し、強勢のある音節では [-ɛɪ] と発音するように努力すればいい。例えば、「ここに座っていいですか」と尋ねるような場合には、'Ga i eistedd yma?' を、['gɑ i 'eisteð əma] と発音し、「アイステズヴォドに行きたい」と言いたければ、'Hoffwn i fynd i'r Eisteddfod' を ['hɒfɒn i 'vɪnd i'r əɪst'ɛðvɒd] と発音して、両者の相違を楽しんでみるのもいい。

勿論、いずれか一方の発音だけで通しても、通じない訳ではないことは言うまでもない。